

策に使えるのではないか」——そんな期待をもたせるものだった。

「阻止リングを見つけたとき、息子に電話して、『今夜は赤飯だ!』と言いました(笑)」

日本食品分析センターも驚いた検査結果

さて、ハナビラタケが高い抗菌性を持つことを知った中島会長は、1998年3月財団法人日本食品分析センターに依頼して、ハナビラタケの成分を本格的に分析してもらうことにした。抗菌性を持つ物質がなんであるのかを確かめたいと思ったのである。

ひとくちにキノコといっても、その成分はさまざまである。水分・タンパク質・炭水化物のほか、脂質・ビタミン・ミネラル・繊維質などが含まれる場合が多いが、キノコの種類によって成分比は異なる。抗腫瘍(抗がん)作用があるとされる β グルカン^{ベータ}も、種類によって含有量が大きく異なる。

成分分析を依頼した時点では中島会長はのちのちのテーマとなってくる β グルカンに、さして特別な期待はしていなかった。狙いはあくまで抗菌性の確認にあったのだ。 β グルカンについては「まあ、なるべく多ければいいな」程度にしか考えていなかった。

ところが、日本食品分析センターから報告されてきた検査結果は、予想だにしないものだった。そこにはなんと、「 β グルカン量/100g中43・6g」という項目があったのだ。

「これは何かのまちがいじゃないか」——そんな言葉が口をついて出た。それもそのはずである。

βグルカン量が多いとされるブラジル産アガリクスですら、100g中11・6g程度でしかないのだから……。検査結果が正しいとすれば、ハナビラタケにはアガリクスの4倍近くものβグルカンが含まれていることになる。

そこで、中島会長は日本食品分析センターに電話をかけ、「このβグルカン量は、計測まちがいではないですか？」と問い合わせた。しかし、答えは――。

「私どもも、βグルカン量が多いことに驚いて、何回も測定をし直しました。だから、この数値は正確です」

受話器を置いてから、中島会長は祝杯をあげたいような気分だった。βグルカン量がこれだけ多いからには、ハナビラタケには相当な抗腫瘍作用があると推測できる。すなわち、ガン予防などに役立つ可能性が高いのだ。

中島会長は、「このハナビラタケを世に広めることは、私に与えられた使命なのかもしれない」と考えた。いささか唐突なようだが、そう考え至るには、理由があった。

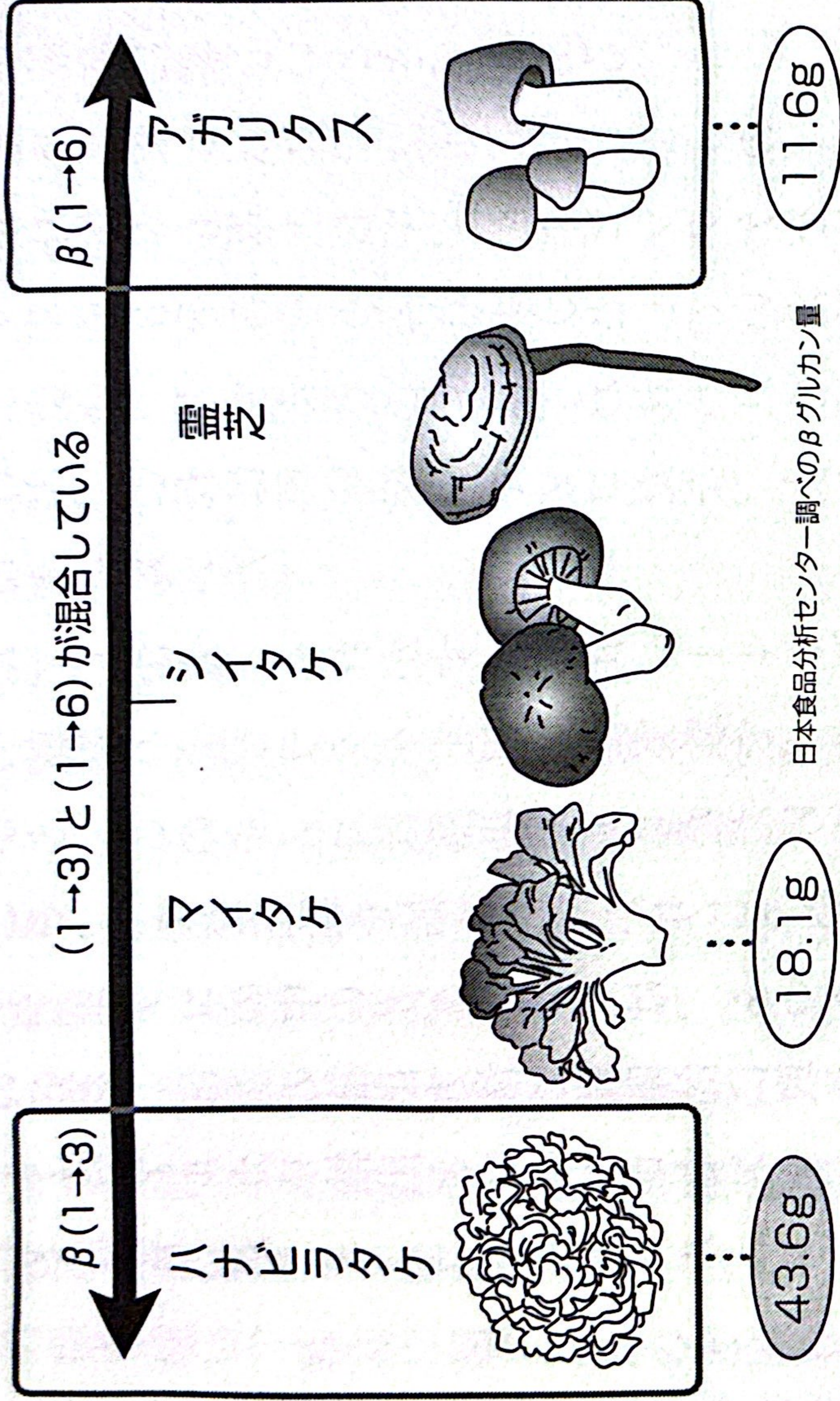
副作用のないガンの薬はできないものか……

会長は、これまでの人生で少なからず「ガンに縁がある」と言つて、振り返る。

まず第一に、北海道大学での学生時代、会長が病理を学んだ師は、いちかわこういち市川厚一博士（1888～

1948）であった。

ガンに効くβグルカンとは、どのキノコなのかな？



「ハナビラタケ:アガリクス」のβグルカン量は約4:1だが、ガンに効くβ(1→3)グルカン量で見ると、100%:0%となり、比較不能。ハナビラタケがキノコの中では、圧倒的なトップだ。アガリクスの中のβグルカンはガンには効かない、といえる。ただし、他の成分が効くのかも知れないが……。消費者は「βグルカン」だけでは、もうダメされなくなったのだ。

ハナビラタケ100g中の抽出方法別の最新βグルカン量

(東京薬科大学薬学部免疫学教室・2001年3月発表)

	βグルカン量	タンパク質
熱水抽出 1倍	9.44g	9.44%
熱水抽出 4倍	1.66g	1.66%
冷アルカリ抽出 1	17.94g	17.94%
冷アルカリ抽出 2	8.52g	8.52%
熱アルカリ抽出	7.68g	7.68%
合 計	45.24g	

乾燥微粉末(100g)

どうやらハナビラタケの中のβ(1→3)グルカン量は、最新の調査でさらに増えていることが判明したようだ。

抽出液	投与量 (マイクログラム×3)	抑制率 (パーセント)
コントロール	0	—
熱水抽出	500	99.5
	100	94.4
	20	83.6
冷アルカリ抽出	500	90.0
	100	95.7
	20	62.1
熱アルカリ抽出	500	99.0
	100	100.0
	20	54.9

マウスの実験で確かめた、ハナビラタケの抗ガン作用の驚異的な効果。100%という数値が出た。

また、β（1→3）グルカン投与については、前述した三種類の抽出・熱アルカリ抽出）で得たものを、それぞれ使った。抽出方法

行なつたマウスを使ったガンの実験から、これがもつとも効率的であつた。たとえば毎日投与したとしても、三回のみの投与の場合と、実験結果

投与は、実験開始後7日目・9日目・11日目の三回行なわれた。な

は突出して、キノコの中、
ンが100%、
与群において、
熱アルカリ抽出、
ン抑制効果が、
おり、どの抽出、
結果が上の表、
較すること、
解剖し、ガン、
そして、ガン、
かを確認するた

めた。

まず、「VDH反応」を確かめた。これは、実験マウスがまだ生きている段階で、抗ガン作用があるかどうかを見るものである。マウスに抗ガン剤を注射してから、耳の血管が充血して赤くなれば反応アリとなる。この「VDH反応」が出るのが、抗ガン作用を示す一つのサインとされている。いまや人間のガン治療に用いられている抗ガン剤「レンチニン」の実験過程で明らかになった反応である。

そして、ハナビラタケから抽出したβ（1→3）グルカンを注射したところ、マウスの耳が赤くなった。「VDH反応」が出たのである。

「よし、次の段階に進もう」

実験結果は「突出した抗ガン作用」

「次の段階」とは、マウスの抗ガン試験である。じつさにマウスの身体に人工的なガンを作り、それがどの程度退縮するかを確かめる実験のことだ。

実験は、体重約30gのマウスを、実験ごとに10匹ずつ用意して行なわれた。

これらのマウスの鼠蹊部（もものつけ根）に、「サルコーマ（肉腫）180」というガン細胞を皮下注射し、移植する。これらのマウスはまちがいなくガンになるから、MH-3株のハナビラタケから抽出したβ（1→3）グルカンを20・100・500マイクログラムずつマウスに投与

して、どのくらいガンが退縮するかを確かめるのである。

投与は、実験開始後7日目・9日目・11日目の三回行なわれた。なぜ三回かといえは、過去に行なったマウスを使ったガンの実験から、これがもつとも効率的であるとわかっているからだ。たとえば毎日投与したとしても、二回のみの投与の場合と、実験結果の差は生まれない。

また、 β (1→3) グルカン投与については、前述した三種類の抽出方法 (熱水抽出・冷アルカリ抽出・熱アルカリ抽出) で得たものを、それぞれ使った。抽出方法によって効果に差が出るか否

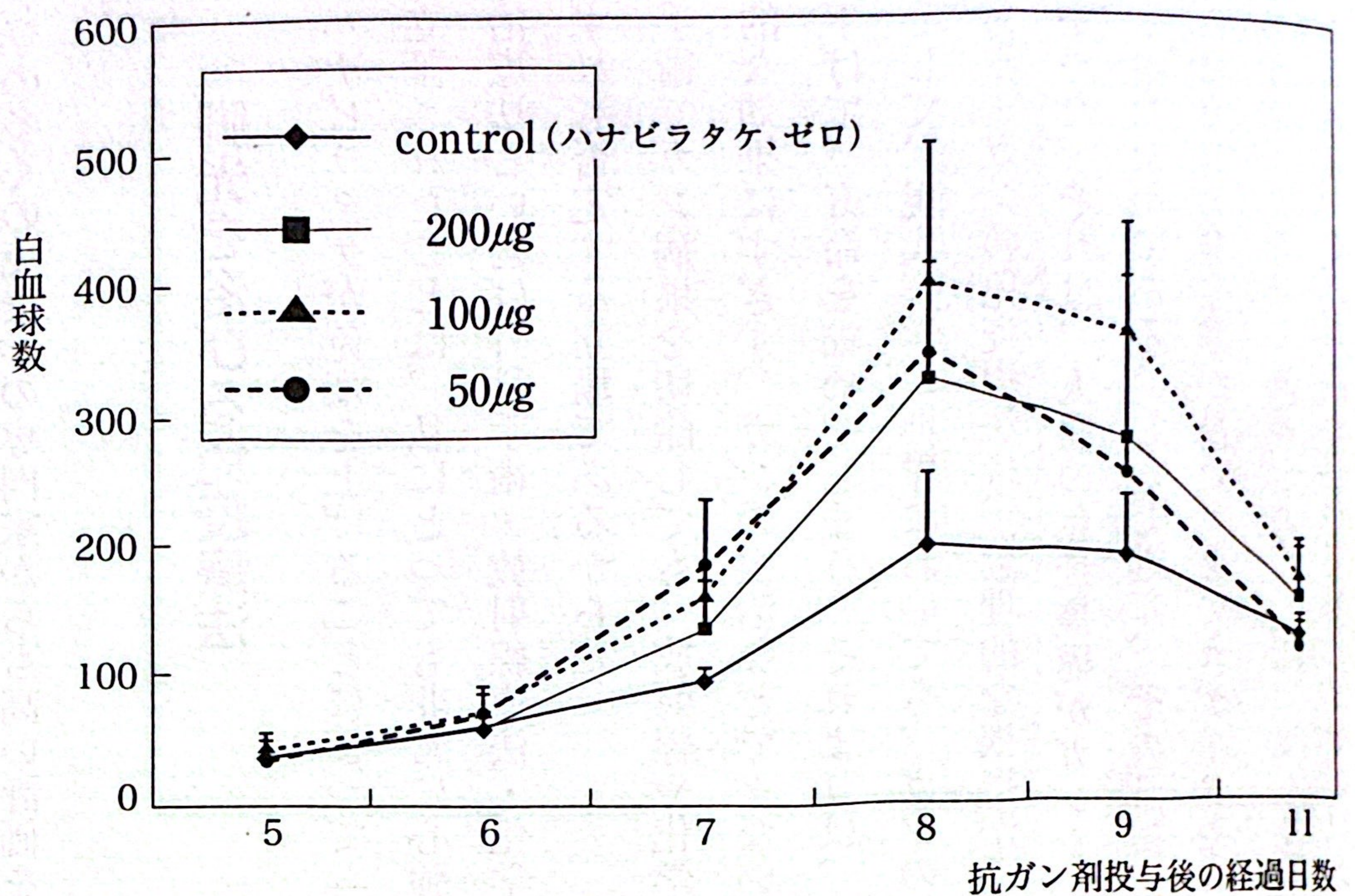
抽出液	投与量 (マイクログラム×3)	抑制率 (パーセント)
コントロール	0	—
熱水抽出	500	99.5
	100	94.4
	20	83.6
冷アルカリ抽出	500	90.0
	100	95.7
	20	62.1
熱アルカリ抽出	500	99.0
	100	100.0
	20	54.9

マウスの実験で確かめた、ハナビラタケの抗ガン作用の驚異的な効果。100%という数値が出た。

を確認するためだ。

そして、ガンの移植から35日目にマウスを解剖し、ガンを摘出。その腫瘍塊の重さを比較することで、ガン抑制率を判定した。その結果が上の表である。見てもらえばわかるとおり、どの抽出液についても、非常に高いガン抑制効果が表れている。とくに顕著なのは、熱アルカリ抽出液の100マイクログラム投与群においては、すべてのマウスにおいてガンが100%抑制されていたことである。

キノコの中でもハナビラタケの抗ガン作用は突出していると実感した。



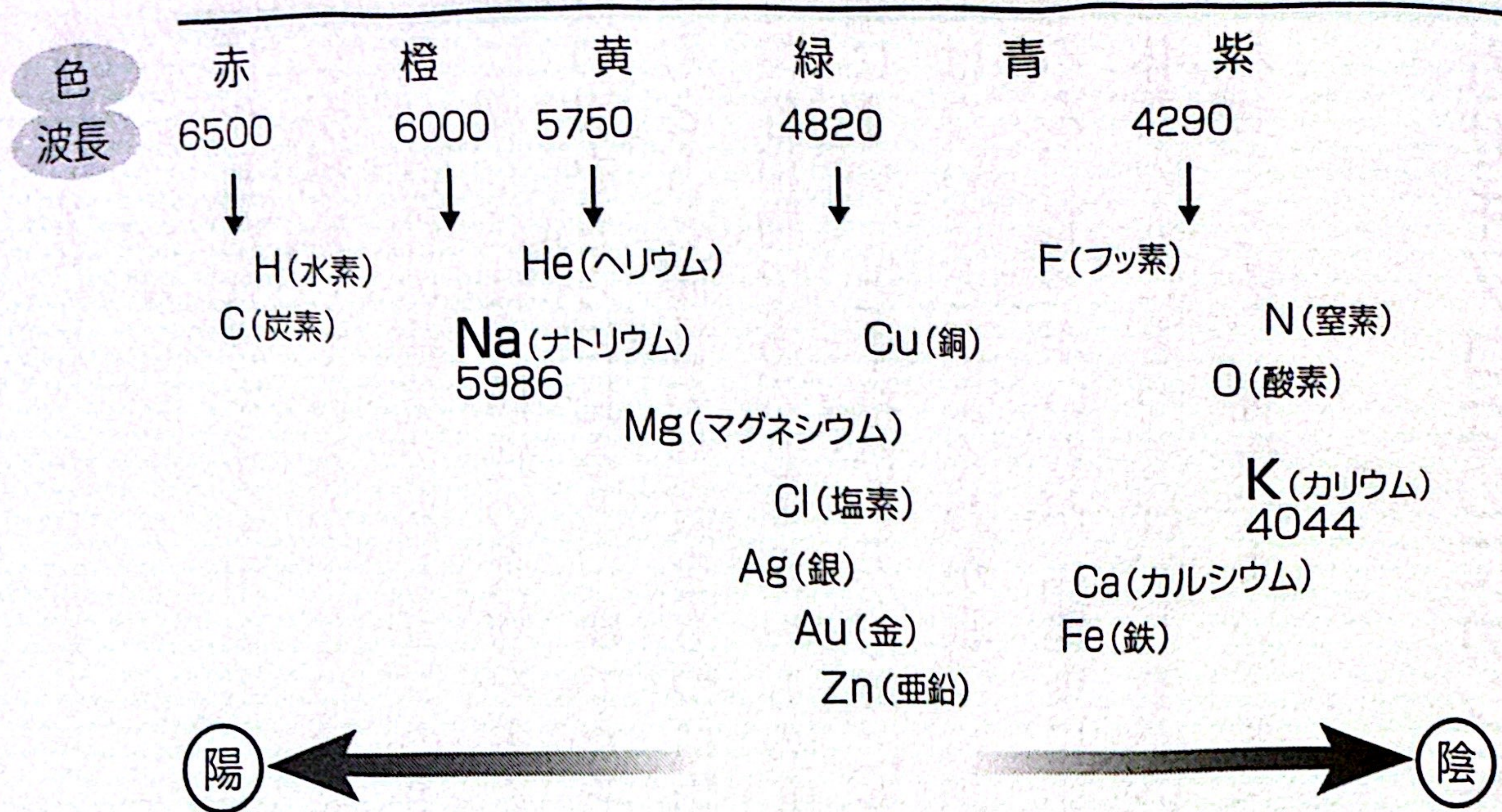
ハナビラタケを連日、口から飲んだときの抗ガン作用の効果を 見てみた

抗ガン剤（シクロフォスファミド）を使用すると、副作用で白血球が急減する。それを、ハナビラタケの経口投与で白血球を増やせるか（副作用を軽くできるか）、マウスを使って実験したもの。

すでに注射投与では効果を見ていたが、「飲んでも効く」ことを証明したグラフだ。

ハナビラタケを飲んだマウスと飲まないマウスとの、白血球増加の差が、7・8・9日目には大きく出てきた。副作用からの回復が長くつづき、免疫を高め、抗ガン作用が働いているのがよくわかる。

分光学的元素分類表



植物の陰陽判定は化学的に分析できる。その場合、植物を構成するミネラルの中の、ナトリウム (Na) とカリウム (K) の関係が重要なのだ。

食品中のNaとKの含有量そしてK/Na比

			Na	K	K/Na
玄米		(生)	2	250	125.0
		(炊いたもの)	2	110	55.0
そば		(生)	1	160	160.0
		(ゆでたもの)	2	34	17.0
ニンジン根		(生)	26	400	15.4
		(煮たもの)	27	390	14.4
じゃがいも		(生)	2	450	225.0
		(煮たもの)	2	250	125.0

※この表は日本食品分析センターによる分析結果を基に作製している。 ※Na,Kの含有量を示す単位はmg/可食部100g

食べ物の陰陽判定は「炊いた玄米」のK/Na値55を基準にして、55より大きいと陰、55より小さければ陽、と考える。

	Na	K	K/Na	
エノキタケ (生)	19	2100	110.5	陰
シイタケ (乾燥)	4	360	90.0	〃
ヒラタケ (生)	2	340	170.0	〃
マツタケ (生)	1	330	330.0	〃
マイタケ (生)	2	410	205.0	〃
アガリクス (乾燥)	7.4	2910	393.2	〃
ハナビラタケ (乾燥)	20.1	920	45.8	陽

(日本食品分析センター調べ)

キノコ類のNa と K の含有量、そしてK/Na比

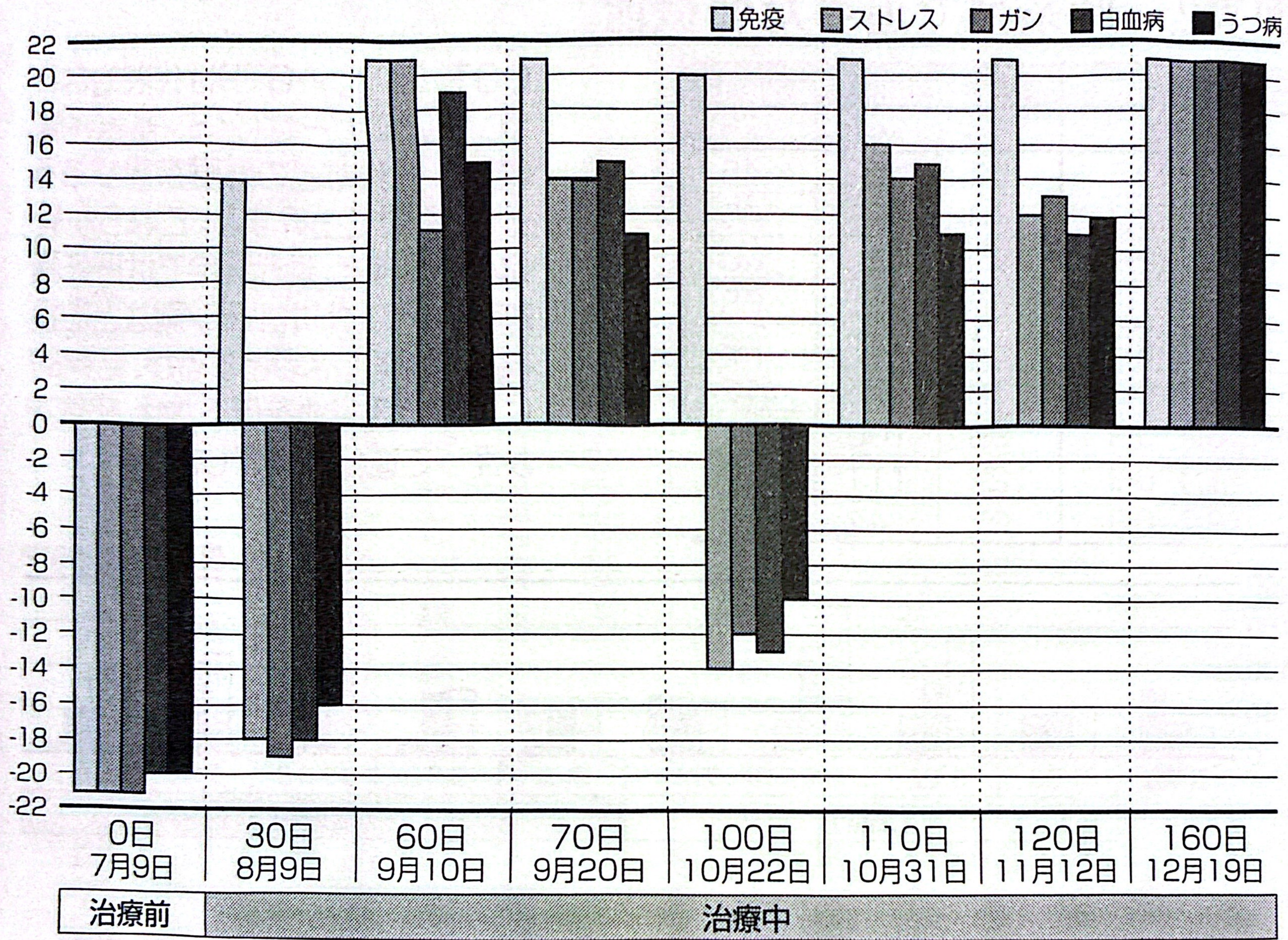
シイタケも陰性で、アガリクスはそれよりもさらに陰性であることがわかった。

ハナビラタケだけが「陽性のキノコ」であるという発見は、ガンへの有効性をさらに確信させた。

上の表は、代表的なキノコ
Kの含有量、およびK/Na値
たものである。

ごらんのとおり、シイタケ
キタケ、ヒラタケ、マイタケ
タケなどのキノコは、いずれ
り高いK/Na値を示してい
わち、すべて陰性なのであ
また、「ガンに効く」と言
ガリクスのK/Na値は390
あり、これも強い陰性であ
がって、陰陽論から見た場合
リクスが陰性の病気であるガ
善するとは考えにくい。む
ンの患者さんの陰性体質を上
てしまうはずだ。
そして、注目すべきは、ハ
タケのK/Na値である。

図表1. 時系列に追った北村さんの基準測定値



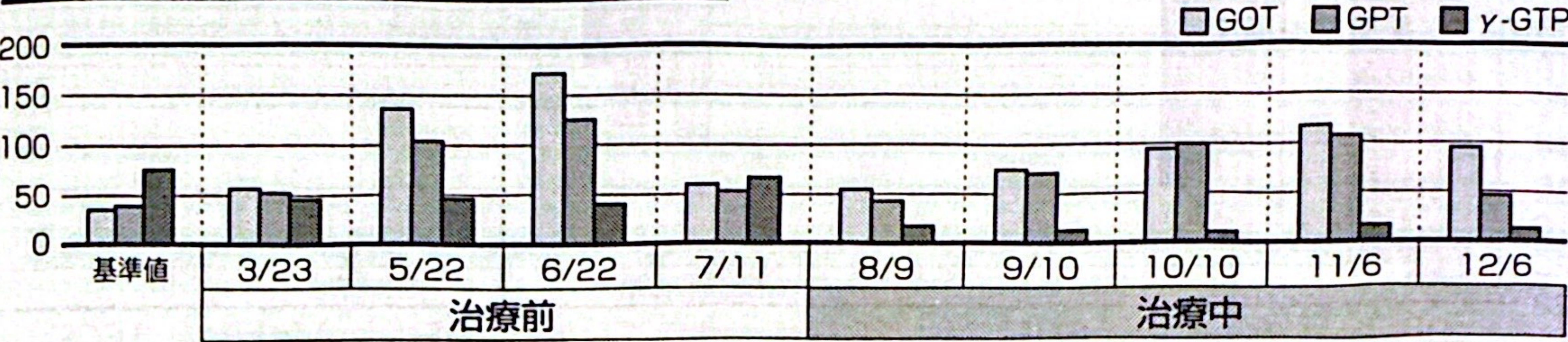
治療開始後100日目の排毒現象がはっきりと表れている。

読者の中には、治療開始後、免疫機能以外の測定項目がマ
ていることを、不思議に思う
しれない。しかしこの変化こ
いうところの「好転反応」あ
という排毒現象であると考え
能が高まり、人体がさかんに
その毒素の影響で、ほかの測
が低下するのである。ほかの
過程でも、しばしば見られる
図表2（次頁）は治療前、
の変化を示している。左側に
グラフが基準値であり、これ
T、GPT、γ-GTPの値
たい。治療中もこれらの値は
準値内におさまってはいない
生体の排毒現象がつづけられ
えらる。

図表2. 時系列で追った肝機能

検査日	GOT	GPT	γ-GTP
基準値	38	43	75
3月23日	57	52	45
5月22日	143	105	45
6月22日	179	135	40
7月11日	60	55	68
8月 9日	54	42	18
9月10日	78	75	12
10月10日	95	100	11
11月 6日	127	111	17
12月 6日	97	47	13

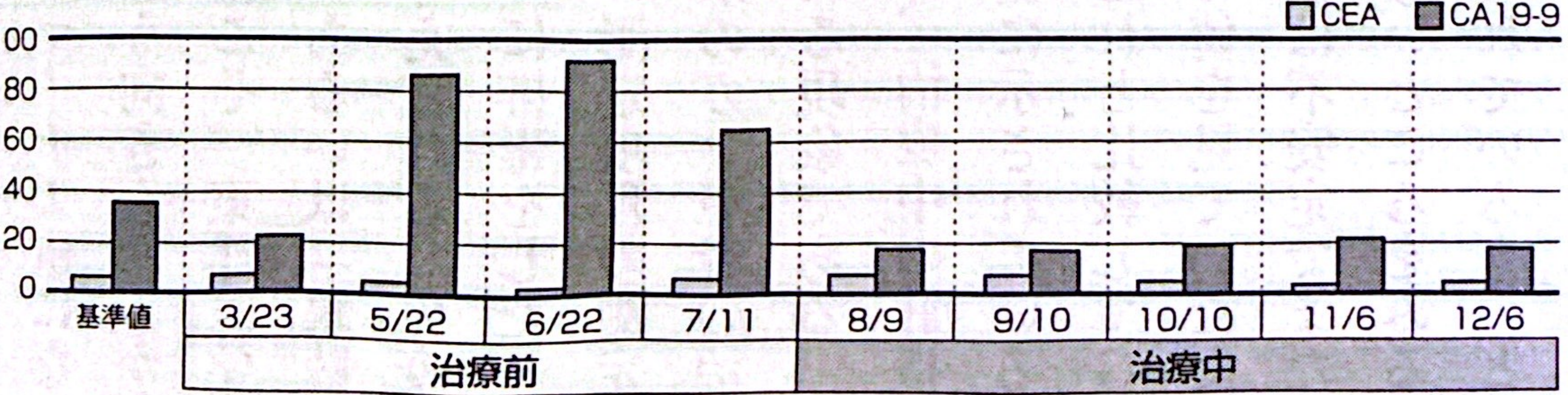
GOT、GPT、γ-GTPは代表的なトランスアミナーゼ(アミノ基転移酵素)で、肝炎などの肝臓疾患があると、血液中で上昇する。これらが異常値を示すと、現代医学では肝底護剤やステロイドホルモン剤などを投与して対処しようとするが、結果的に人体の免疫力を低下させ、病気をかえって進行させてしまう。



図表3. 時系列で追った腫瘍マーカー

検査日	CEA	CA19-9
基準値	5	37
3月23日	5.3	22.8
5月22日	4.3	86
6月22日	3	94.8
7月11日	5	66.1
8月 9日	6.2	19
9月10日	5.3	18
10月10日	4.9	20
11月 6日	3.1	22
12月 6日	4.3	19

腫瘍マーカーとは、ガン細胞が作り出す物質で、それを組織、細胞、体液、または排泄物中に検出し、ガンの存在、ガン細胞の種類、および進行度を知るうえでの目安としている。



して変化はない。腫瘍マーカーであるβ2MGはもともと基準値内にあったが、BFPは127 ng/mlという異常値から63 ng/mlと基準値内に回復している。
 この患者さんの波動エネルギーの変化は、

入院治療中	初診時	免疫機能 (B222)	ストレス (E222)	ガン (F005)	ホジキン病 (E097)	糖尿病 (I009)
21	-21					
-19	-21					
-15	-21					
-17	-21					
-19	-21					
01.12.18 測定	01.11.9 測定					

初診時と入院治療中の2001年12月18日に行なった検査結果を比較すると、患者さんの波動

